「あの子を知りたい」

弁論大会なんて面倒くさい。

担任の告知に、わたしは心底そう思った。

「日頃思っていること、この機会に是非主張したいこと、テーマは自由です。君たちの想いを率直に書いて欲しい。難しいことを書こうとか、大人受けのいいことを書こうとかそんなことは考えなくてよろしい。今の自分の気持ちを、自分の言葉で書くこと。これが大事です」

怠そうな顔で聞き流していたのは、わたしだけではないはずだ。

チャイムが鳴る。

配られた二枚の原稿用紙を、乱雑に、鞄に突っ込んだ。

一体何を書けと言うのだろう。何を主張しろと言うのだろう。

ただ大人になるまでの日々を、どうにかやり過ごしているわたしたちに。

提出日の前夜。

机の上に広げられた、いまだ白紙の原稿用紙。

教科書以外の本は読まないし、宿題以外で文章を書く機会もない。それなのにいきなり八百文字も書けだなんて、どうかしている。

電気スタンドの下、煌々と照らされた真っ白い紙の中に、少ない頭の中身をぶちまける。

あれもダメ、これもダメ。

使い物にならないガラクタを選り分けて残ったのは――マス目を埋めるには何の役にも立ちそうもない想いだけだった。

ぼんやりと浮かんだのは、斜め前のあの子の背中。

水泳部のわりには、線が細く色白のあの子。

無口で目つきが悪いのに、何故かクラスメイトたちから好かれているあの子。

――あの子は一体、何を書くのだろう。

あの子はどんな言葉で、

どんな主張をして、

どんな文字を書くのだろう。

急にそんなことが気になって気になって仕方がなくなった。

あの子の名前も顔も声も知っている。けれど、あの子自身がいつも何を考えて生きているのか、わたしは何一つ知らないのだ。

知りたい。あの子が何を書くのか。
読みたい。あの子の心の中を――

どうにかマス目を埋めた原稿用紙は、提出した翌日にはコピーされ、一冊の束になって返って来た。
全員分を読んで、投票はひとり一票。最終的に一番票を集めた人がクラス代表として校内大会に臨み、その後は学年代表、学校代表と順に決めていき――などと説明する担任の話はどうでも良かった。
それよりも早く、あの子の書いた文章が読みたかった。
ようやく静寂が訪れ、逸る気持ちを抑えながら、それでも出席番号一番から順に読んでいく。誰かを目当てにしていると周囲にバレたらここで死ねる。
課題が出た時はみんな死んだ魚みたいな目をしてたのに、蓋を開けてみたら真面目な文章ばかり並んでる。ウケる、社会の縮図じゃん。
学校のこと、家族のこと、趣味のこと。それから社会問題に国際問題。上手にまとまっている内容もあれば、最後まで何が言いたいのか分からないものもあった。それでも手書きだからか、一生懸命書いたのだろうことは伝わった。
手紙も交換日記も廃れた時代、クラスメイトの手書きの字を拝む機会は貴重だ。案外、みんな下手くそだ。きっとスマホの使い過ぎ。人のこと、言えないけど。
なんて内心笑ってたら、あの子の番。
一気に鼓動が早まる。心臓が爆発しそう。
バレないように深呼吸する。
指先を擦り合わせて、一枚、捲る。
さらりとした、特徴の少ない字。筆圧が弱いのか、印刷の具合で端々が霞んでいる。
ああ――あの子の字が、手の中にある。
わたしは思わず、目の前の原稿用紙を抱き締めたい気持ちに駆られた。
内容も真面目で、情熱があって、意外と論理的だ。
水泳が健康維持に有効だという説を根拠に、長期休み中に地域住民のためにプールの開放ができないか、という提案がきちんとまとまっていた。目で追って、心の中で読み上げて、今度は頭の中に情景を思い浮かべてみて、三巡。
静まり返った教室で、わたしひとり、手に汗を滲ませる。
作者の気持ちを考えろなんて問題が出るといつも鼻で嗤ってたけど、今は全力で考えたい。隅から隅まであの子の気持ちを知りたい。この言葉に、一文に、どんな想いが反映されてるのか読み解きたい。
面倒くさいなんて思ってごめん、弁論大会。
余韻に包まれながら次のページを捲ると、見覚えのある字が現れて思わず顔を顰めた。クラスメイトのことをもっと知る機会を増やすため、自己紹介カードを作成したらどうか、と

いう深夜テンションで書き上げた提案は、冷静に読み返すと何とも稚拙で下心に満ちている。恥ずかしさに耐えられず、途中で紙束を閉じた。

投票で、クラスの代表が決まった。

ボランティアで行っている清掃活動を通して環境問題について考えたという、よくできた内容だった。

斜め前のあの子は三票獲得した。絶対に言わないけど、そのうちの一票はわたしだ。

そして意外なことに、わたしにも一票入っていた。

誰が入れたかは分からない。

でも、もしかしたら。なわけないか。いや、どうだろう。

チャイムが鳴る。

原稿用紙の束を、今度はそっと、鞄にしまった。